

## 「中国女性発展綱要」を読み解く—1995年以降中国女性学者との交流を通じて 大浜 慶子（中国）

中国の男女平等推進に関する法律は「中華人民共和国憲法」の中で基本原則がうたわれ、「中華人民共和国女性権益保障法」などにより女性の権利が守られています。このほか具体的なビジョンや政策課題を指し示した「中国女性発展綱要」（以下「綱要」）という国内行動計画がこれまでに3度策定されています。最新版「綱要（2011－2020）」の「女性と教育」の主要目標には、高等教育機関の女性学課程の普及率をさらに向上させること、施策として女性学の等級を引き上げること、大学に女性学専攻・課程を開設し、専門人材の育成を奨励していくこと、教育内容や教育課程のジェンダーの評価を実施することが提言されており、中国政府が女性学教育に力を入れて取り組んでいる状況がうかがえます。国の行動計画にこのような文言が盛り込まれたのは中国の女性学者たちの奮闘の賜物であるということを実感しています。

私が中国女性学と最初に出会った1995年、すなわち第4回世界女性会議の北京開催の年、第1期「中国女性発展綱要(1995－2000)」が世に出されました。しかしこの中に「女性学」や「ジェンダー」という用語が入っていたわけではありません。

1980年代、改革開放が始まり、社会主義計画経済から市場化政策への転換によって多くの女性問題が噴出し、従来のマルクス主義女性解放論では補えないこれらの問題を理論・実践面から解決すべく民間の研究運動として出発した中国女性学は、1990年代、アカデミズムの周縁から主流化を目指します。世界女性会議と並行して開催されるNGOフォーラムにより、女性学研究の団体を含む民間女性団体が中国最初のNGOとして認定されますが、当初は波乱含みでした。しかし社会主義市場経済政策が軌道に乗り、WTO加盟交渉がスタート、「全球化」（グローバル化）を見据えた政治、経済、文化の大胆な改革案が打ち出され、「北京宣言」、「行動綱領」に結晶した世界女性運動の理念が、次第に中国の女性たちを感化していきます。外国人である私が中国女性学の輪の中に誘われたのもちょうどこの頃です。中国での研究交流活動は、本職の仕事の退勤後もしくは土日・休日を利用して行うというまさに中国女性学の真骨頂、草の根の活動を私自身も体験しました。中国女性学の草創期は、改革開放によって開かれた小さな隙間を女性たちが戦略的に紡いで新たな公共圏へ発展させていったといわれています。中国の女性たちと親交を深めるうちに、その公共圏が国外をも包摂する大きな連鎖へとつながっていることを感じ取りました。

改革の勢いに乗って出された2期目の「中国女性発展綱要（2001－2010）」は国際的な視野に立って策定された画期的なプランと位置付けられます。「女性と教育」の施策にはじめて「カリキュラム、教育内容、教学方法の改革において、ジェンダー視点を教師養成課程へ組み入れ、高等教育の関連の専攻に女性学、マルクス主義女性観、ジェンダーと開発の課程を開設し、教育者と学習者双方のジェンダー意識を強化する」ことが明示されました。ここで傍系から正系へ、正当な地位を獲得した女性学とジェンダー研究は今世紀初頭、

本格的な制度化をめざし全国に開かれたネットワークを幾重にもつくっていきます。それは大衆運動方式と呼ばれる社会主義の伝統的な組織形態とは異なる新しい試みでした。この過程で大学の女性学・ジェンダー研究講座が増設され、北京大学や中華女子学院に独立した女性学科や専攻をつくる動きが活発化します。日本でもなかなか実現しなかった独立学科の創設は、担当教師が情熱を注いで立派な後進を育て、内外に実績を示し勝ち取ったものでした。このほか女子教育家の史静寰（シ・ジンファン）教授（清華大学教育研究院副院長）が中心となって実施した、カリキュラムとジェンダーの関係を明らかにする調査研究も、現場の教育課程改革に大きな影響を与えています。これらの努力の方向が冒頭で述べた第3期の「綱要（2011－2020）」の中に引き継がれ、さらなる発展目標として取り入れられているといえます。



改革開放後復興した女子大学—湖南女子大学

今世紀の中国の女性学・ジェンダー研究の発展はまた、1990年代後期の大学の大量化政策に伴って急増した高学歴女性や女性教員、これら新興女性集団の中で生まれ、彼女たちのアイデンティティの創出や帰属感の再構築にも大きくかかわっています。

しかし中国女性学の興隆は喜ばしい反面、それだけ国内のジェンダー問題が山積し、多様化、複雑化していることを暗示するものです。学校教育のように統計上は性差が解消しているものの、実際のジェンダー不平等はより隠蔽された形で深層部に広がっているというケースも見受けられます。階層格差という高学歴女性と異なる集団間の込み入ったジェンダー格差問題など、21世紀の課題に中国の女性学はどのようにつながり、新たな道筋を開いていくのでしょうか。今後もその動向を注視していきたいと思えます。